

## 何のために教師になり 何をして生きるか

### 1 「アンパンマンのマーチ」

やなせたかしの「アンパンマンのマーチ」の歌詞にどんな思いがこめられているのか、私は長く、気にも留めずにやり過ごしてきた。アニメの主題歌だという先入観が邪魔したからだった。

私はその歌詞とほんとうに出会ったのは、10年ほど前に参観した中学校の授業においてだった。

授業は、「やなせたかし」の生き方に迫るものとして行なわれた。その学びの過程で、授業をした教師が生徒に考えさせたのがテレビドラマで流されていたその歌詞だった。私の目の前で生徒たちがその歌詞について語り合った。私はグループから聞こえてくる生徒たちの言葉に耳を澄ました。すると、私の心は、学び合う生徒を見つめるとともに、いつの間にか歌詞そのものに惹きつけられていった。そして、本号のキーワードとして取り上げた歌詞のワンフレーズが私の心に刻み込まれることになったのだ。

「やなせたかし—アンパンマンの勇気」(梯久美子・文)という伝記文が、小学校5年の国語教科書(光村図書)に掲載されたのはその何年か後だった。そして、今、NHKテレビの朝ドラ「あんぱん」が放送され、やなせたかし兄弟の育ての親ともいえる町医者叔父・柳井寛(亡き父の兄)がたかし兄弟に、何度となく語る言葉を耳にすることとなった。その言葉こそ、私の心に刻み込まれた「アンパンマンのマーチ」の一節「何のために生まれて、何をして生きるのか」だったのだ。

私の父は、私が生まれて100日たった頃、出兵した。私は、母におぶわれて、汽車に乗って行く父を見送ったのだが、それが私と父の最後だった。父は、戦いの最南端・ニューギニアで戦死した。とは言っても、生きていたのか死んでいるのか分からず、父の死が判明したのは、生きて還られた同じ部隊の人の知らせによってだった。その時私は4歳になっていた。

やなせたかし一家も戦争に翻弄された。この「たより」を発行する頃のドラマでは、二人がそれぞれに出兵する様子が描かれている。そして、たかしは生きて帰ることになったが、弟の千尋は戦死することになる。「アンパンマンのマーチ」に「何のために生まれて、何をして生きるのか」と歌われたのには、そういう背景があるのだ。私の一家も、やなせたかしの一家と同じように、戦争で家族が引き裂かれた。その共感心があったから私の心は一気にそのフレーズに向かったのだ。

### 2 私は、何のために生まれて、何をして生きてきたのか

私の父は29歳で亡くなった。だから、私は、あと5年もしたら、父の3倍も生きたことになる。その事実が、最近、年老いた私の心に問いかけてくる、「おまえは、何のために生まれて、何をして生

きてきたのか」と。

私は、大学を卒業してすぐ学校の教員になった。そして、81歳になった今も、20年も前に退職したにもかかわらず、外部助言者として学校に足を運ぶ日々を送っている。だから、私は、1年生として小学校に入学したときから今日まで、70年以上学校という世界で生きてきたことになる。子どもとしてではなく職業人としてと考えると、それは60年近い年月になる。60年、なんと長い年月だろう。

「あんばん」という朝ドラが始まったことにより、私は、その長い年月を改めて自覚することとなった。そして、再び、前述した「アンパンマンのマーチ」の一節がよみがえり、私自身に問いかけることとなったのだ。そして、今、はっきりと、それに答えることができる、「私は教師になるために生まれたのだ」と。でも、「アンパンマンマーチ」のフレーズはそれで終わりではない。その後「何をして生きてきたのか？」がついている。だから、自問自答はさらに続けなければならない、「おまえは、何をして生きてきたのか？」と。

### 3 教師である自らの根底にあるべきものは

私は、教員として何をしてきたか、それははっきりしている。「授業づくり」だ。私自身の授業づくりはもちろん、学ぶ会の仲間たちの授業づくり、私が訪問する学校の教員たちの授業づくりと変遷してきたが、立場がどう変わろうと「授業づくり」という軸は変わらなかった。

この「たより」を書いている最中、「学び合う教室が生まれるとき」という私の論文が掲載された月刊誌『教育研究7月号』（筑波大学附属小学校・初等教育研究会）が発刊されて送られてきた。

さっそく私は、私自身の筆になる4ページの文章に目を通した。すると、ちょうどそのとき、「何のために生まれて、何をして生きてきたのか」という「アンパンマンのマーチ」の一節が頭の中を占めていたことでもあり、「私は教師として何をして生きてきたのか」ということを、私自身の文章から探すことになった。

私の教師としての道は、間違いなく「授業づくりの一本道」だった。けれど、そうではあるけれど、その『授業づくり』は、どういう授業づくりだったのか？ということを考えなければならない。それが、その月刊誌の文章に表れているはず、そう考えたのだ。

3か月前に、しかもそういう意図もなく書いたその文章に、都合よく書けていないかもしれない、けれど、意識せずに書いた文章だからこそ、本当の自分の意識が見えるはずだ、そう思った。本当の気持ち・意識は、無意識で書いたものの中に存在しているに違いないのだから。

そうして読み返した私に目に映ったのは次のような文だった。

- ・ 「学び合う教室」は、形ややり方で生まれるのではない。クラスメートから学ぼうとする子どもと、すべての子どもをいとおしく想う教師によって生み出すことができる。
- ・ 教師の目が、分からなさを抱えている子どもに向いているか、その分からなさが学びを開く鍵なのだという認識を有しているか、分からなさから学びを生み出すことこそ大切なのだという教師観を抱いているか、すべての出発点はそこにある。

- ・ 私たち教師は胸に刻まなければならない。子どもの「学び合う学びこのよきもの」という実感を生み出す授業をつくるのは教師だと。分からなくて本当に困っている子どものことをなんとかしたいと思わなければいけないのは教師なのだ。
- ・ 「一人の子どもも独りにしない」という信念をもち続けていたい。そして、その実現に向けて、子どもに注ぐ教師の「まなざし」を磨き続けていかなければならない。学び合う教室は、そのような教師の下で確かなものになるのだと考えて。

自分が書いた文を読んで、自分で気づくというのは変なことだが、私が記したこれらのメッセージを読んで、私の授業づくりには一貫して子どもへの意識が流れていたのだとはっきりしたような気持ちになった。

私の授業づくりの根底にあるのは、授業の方法でもなければ、技術でもなかった。もちろん、方法についてもその都度思考し実践してきたし、そこで技術的なものも身につけようとしてきた。けれど、私が追いつけてきたものは、方法・技術だけでは実現しないものだったのだ。私が見つめ続けていたのは、授業というより、子どもの学びであり、そういうふうにして学ぶ子どものことだったのだ。もちろん、それは、ひとくくりにした子どもではなく、一人ひとりの子どもに対するものである。そこが大切なのだが。

そして、私が追い求めてきた教師像は、授業のうまい教師というより、人間性あふれる、子どもと学びに対する深さと温かみを備えた教師だったのだと思う。

私は、「すべての子どもをいとおしく思う教師でありたい」と書いている。そのためにはなんとしても、「分からなさを抱えている子ども」に心を砕かなければならないとも書いている。それは、「一人の子どもも独りにしない教師」なのだとも記している。そして、そういう教師になるために、子どもを見つめる「まなざし」を磨きつづけなければならないとも書いている。

それらは、授業の方法ではないし、技術でもない。

そのことが、奇しくも、私自身が記した文章に表れていたのだが、それは私自身にとって納得できることだった。

#### 4 教師として生きる、人間として生きる

私が追い求めてきた教師像、授業像については、秋田喜代美先生(学習院大学教授)が、拙著『「学び合う学び」を生きる』(ぎょうせい)に書いてくださった解説からもうかがうことができる。

石井先生が書かれている授業記録は、子ども一人一人のことばを正確丁寧に聴き取ると同時に、そこに子どもの息遣いや学びのテンポ、子どもと子ども、子どもと教材がどのようにつながっているかが読み手に伝わる記録である。そして、そこから石井先生が何を読み取ったか、何に心を動かされ、何に驚いたり発見したりしたのかという喜びも併せて伝わってくる。また、同僚を支えたい、若い教師を応援したいという愛情がこもっている。

人間が行う物事には、どんなことであっても、方法や手法、技術や技能、そのために活用する道具や機械、それらを行う環境、そういう一つひとつが必要不可欠のものとして意識されている。それは当然ことである。しかし、それよりも前に、それぞれが「人として生きるために」という根底がなければならぬ。そこに、「人」が「人」を見る「まなざし」の温かさがなければ、どれだけ便利な世の中になっても、デジタル化が進んでも、人間社会は崩壊する。

秋田先生の言葉の中に、「子どもの息遣いや学びのテンポ」とか、「子どもと子ども、子どものつながり」という言葉がある。そして、「何を読み取ったか、何に心を動かされ、何に驚いたり発見したりしたのかという喜び」とも記されている。そのうえ、さらに、教師の「まなざし」がどういうものであるか、その「まなざし」がどれほどに人間味に満ちたものであるかが大切だとも書いてくださったのだと思う。

やはり根底にあるのは、「人間としてどう生きるか」なのだ。やなせたかしの言う「何のために生まれて、何をして生きるのか」なのだ。そこに、どういう「人間らしさ」が宿っているか、ともに生きる「他者に対する尊厳」が滲んでいるか、そのことが問われなければならないということなのだ。

私たちが行う授業は、子どもを対象として、子どもの未来のために行うものなのだから、なおさらそうならなければならない。「授業づくり」に「人間性」が宿っていなければならない。

秋田先生の文章の最後の方に、「喜び」と「愛情」という二つの言葉があり、ここのところを読むと、その二つの言葉が浮き出て見えてくる。一人ひとりに「喜び」をつくり出すために、子どもに「愛情」を注ぐ、それが、私たち教師の仕事なのだ。それが無い授業研究、学級経営、学校経営にはならないのだ。

退職して21年間、たくさんの教師たちと出会い、たくさんの授業を参観し、数えきれないほどたくさん子どもたちを目にし、その子どもたちが生み出す学びに心奪われてきた。

そこで私が先生たちに伝えたいと懸命になったこと、それは、「よい授業をするための方法」ではなかったのだ。子どもが生み出す、深く、心に染み入るような、あるときは心が濡れたり、心が痛んだり、心が辛くなったりすることもあるが、そういう人間的な営みを通して、先生たちが「ほんとうの教師」になっていく、そして、そんな先生たちによって、子どもたちの未来が開かれていく、それがこの世に生を受け教師になった自分たちのもっとも幸せなことなのだ、そう感じてもらうためだったように思う。

この年齢になって感じるのは、私が行ってきたのは、教育論、授業論、子ども論、子どもの発達論といった専門的な学術論説を生み出すことではなく、私が出会う子ども一人ひとりに「尽くす」ことだったのではないだろうか。そして、外部助言者である今は、そういう子どもへの「尽くし」を実行してくれる教師たちに「寄り添い」、「伴走する」、その幸せを得るためなのではないだろうか。

「今日はどんな子どもの学びに出会えるだろうか」「今日もまた心揺れるドラマが待っているのかもしれない」そんな期待に胸躍らせながら、また、自ら有するものを全開にして子どもに向き合う清々しい教師に会えるというたのしみを抱きながら、「何のために生まれて、何をして生きるのか」という、「アンパンマンのマーチ」によって生まれた教師である喜びを胸に刻みながら、私は、今日も、学校の門をくぐる。